

浄土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊一日発行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第三五二号
昭和三十三年四月二十五日印刷 昭和三十三年五月一日発行

第二十四卷

第五号



五月号



最新刊

童話学入門

B 6 360頁 価480円 ㇔50円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山憲尚 著

- ◎ 童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- ◎ 内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部
取次所 日本童話協会

浄土 五月号 目次

表紙・扉絵……………結城天童

生き抜く力……………伊藤春樹……………(2)

伽藍談義……………竹中信常……………(5)

中国綺談……………牧尾良海……………(12)

鎌倉札讀……………石上善応……………(18)

渡辺海旭伝…………………………(10)

効き目のなかった「板まんだら」…………………………(16)

妙好人伝……………中川大仙……………(37)

百万石も笹のつゆ…………………………(29)

蛇と斗う母鼠…………………………(22)

歌壇……………岩野喜久代……………(9)

法然上人の言葉(二)……………増谷文雄……………(32)

扉の御法語……………中陰……………(24)

越冬隊と神様……………投稿の頁……………(21)

老舗と行商……………会員だより……………(40)

ロマンスグレー……………ものしり帖……………(28)

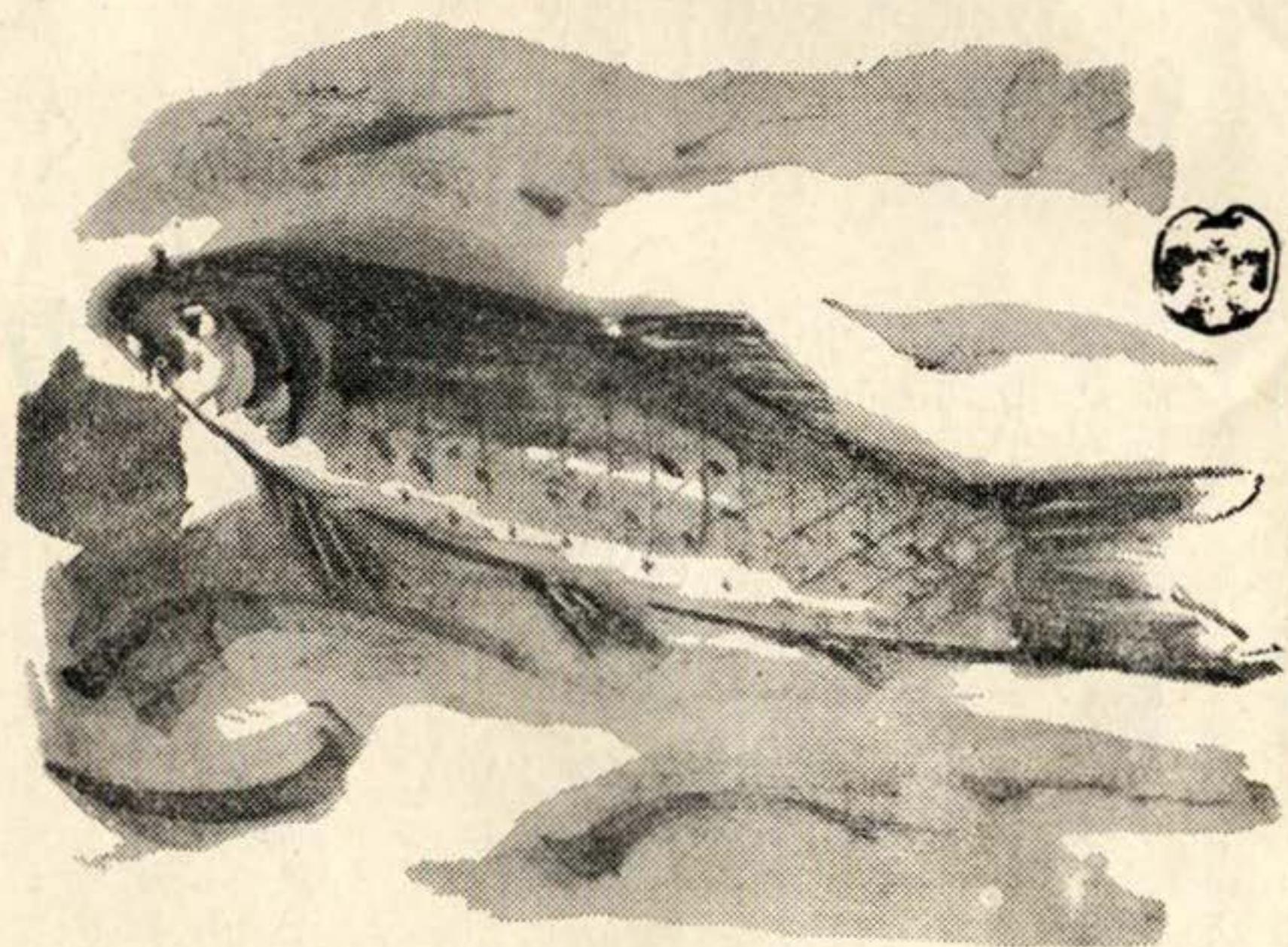
小説 孤影……………一瀬直行……………(26)

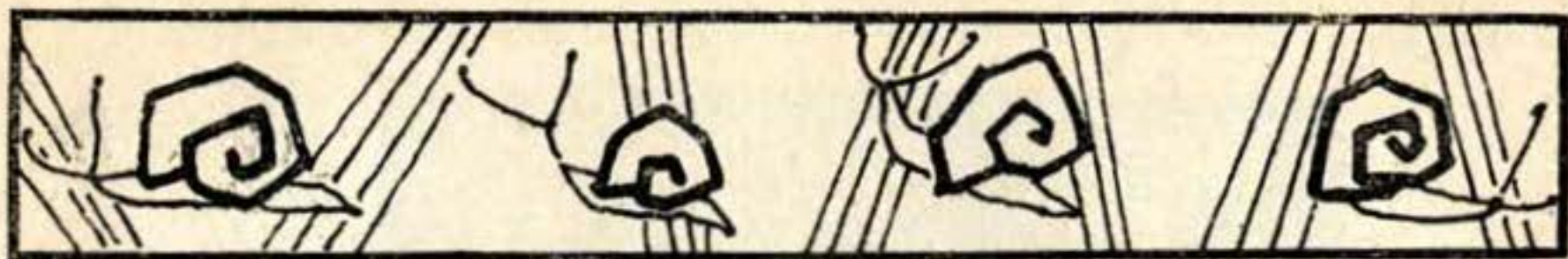
浄土

五月号

このうへは時戒破戒
の沙汰あるべからず。
かくのごとく凡夫のた
めに、おこしたまふ本
願なれば、ただいそぎ
てもいそぎでも、名号
を称すべし。

法然上人御法語



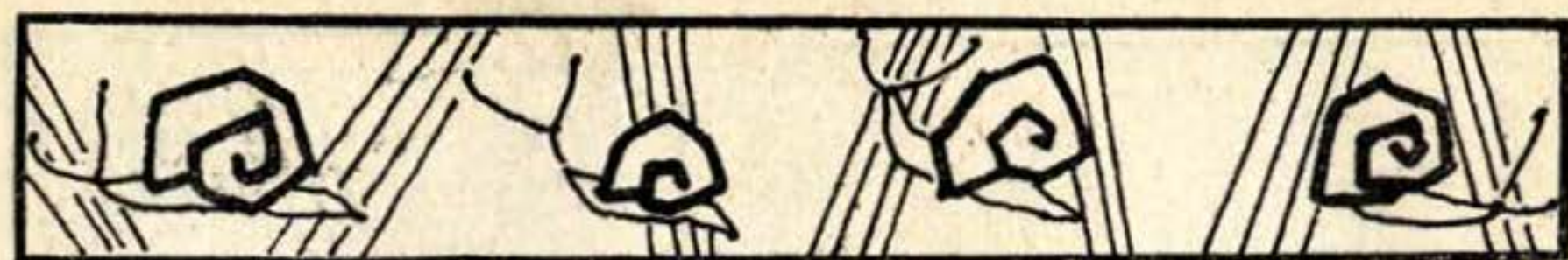


生き抜く力

伊藤 春樹

若い人達が、巣立って、生きた社会に流れこんで、ただ日は浅い。中学を卒え、大学を卒えて、勇んで歩み初めた。いつの世にあっても世間はきびしい。とりわけ、戦後の社会は、昔の秩序に従ってゆけばどうやらゆけたのとはちがい、断層が深いとも言おうか、一つ間違うととんでもない淵に落ちこんでしまう。たださえきびしい社会に、戦後というものが加っている。生きにくい社会になったものだ。若い人達と言っても、いろいろの層があるのはいうまでもないが、いわゆる「青少年」ということばが、なにか、とりたてて言われるようになった。これもいつの世にあっても、悩ましい青少年が問題をおこしとりざたされることに変わりはない。しかし、それぞれの時代によって問題にされようが違う。このくにの、この時に於いて、青少年の

大きな流れが、どのように流れているか。それは、私共の重大な関心事である。問題にされる、青少年がどんな点で問題にされているのであろうか。そして、なぜそうなのか。中々にむずかしいことがらだ。社会の秩序がみだれている。若い人たちに強い希望が失われている。目標がこれぞと言ってない。だれもはっきりしたことを示しもしない。ばく然と、いい人間になること、いい社会をつくることと言っても、青年の情熱はもえない。青年は、何かあこがれを持ちたいのだ。しかも崇高なものもちたいのだ。それがなく、光りがない。それでは、若い心はすさみ、或は、しぼみがちになってしまう。本来、はつらつたる青春のところに、暗いかげさえやどってしまったては困ってしまう。戦争前、戦争中には、度を越えた



国家至上の考が国を覆った。それが崩れてしまった。崩れたままになっている。そこに青少年の希望のない崩れがあらわれているのではないか。成人にはなにか、昔への郷愁がある。しかし、それをそのまま再現しようとしてもできはしない。また、できても愚かしいものができあがるにちがいない。しかし、なにか地の底の方とでも言おうか、うちがわに、もやもやした力が感じられる。紀元節、道德教育、いやがられ、けなされても根強く萌えようとしている。このなにか萌えようとしているものが、熱い青少年につながりを持ち得るのであるか。

カーテンのあちらがわのように、あのようにはつきり、人生も、社会も、わりきってしまって歩むのなら問題は、一応も、二応も解決してしまふ。いま私共の立っているこのくには、そう簡単にはゆかない。なにもあちらがわが、人間造り、国造りに一生懸命だから、自分達もやらなければならぬというわけでは、決してないけれど、たくまずにこの民族、この国に、底から新たに萌え出するものがあり、それが、私共のところに、青少年のところに、力強くひびき、勇気づけてくれるのならすすんで、萌えあがらしてよいではないか。

しかし、この萌え出するものが、なにかかたより、ゆがんでいては困るのである。深く人生に根ざし、高く人々を輝かすものであってほしい。

無量寿如来さまの、かぎりないおん命はいつでも、どこででも生きまします。しかし、そのおん命は、ただ、うきあがったものではないのです。經典に極樂の青色は青い光を、黄色は黄い光りを、赤い色は赤い光りを放つと説かれて居ります。柳は緑、花は紅。如来さまのみ命は、青い色に、赤い色に、柳に、花に、さながらに、みすがたを示し給うのであります。

日本の民族に、日本の国に、み命は、みなぎっているのです。外のどこにもみなぎり給うと同様に、このみなぎるおんいのちが、われらの希望の泉でなければならぬ。青少年のだれにも、内にたたえられた、広大ないのちが、みなぎっているのだ。この力の自覚こそが、国を興し、民族をふるい起させるのだ。国土を浄め、人間を完成させることが、如来さまのさいごの大きな願いごとであります。如来さまのおん命である、われらのいのちを、ふるいたたせることが、青年を、ゆらぎ、そして暗い青年を救うのである。

この力は、生き、抜く力である。

伽^が 籃^{らん} 談 義



竹 中 信 常

先月はNHKの教養特集「日本仏教の歩み」という座談会で、神田寺の友松円諦師と、早稲田大学教授で、日光輪王寺塔中の住職である福井康順博士とが「伽籃仏教」是非で、ちようちようはっしと渡り合った。正に、保守・革新の両チャンピオンの真剣勝負といった形で、聞く者は手に汗を握る思いがした。

ところが、今度は、日本三大新聞の一つといわれる読売新聞（三月二十四日、夕刊）に、これまた早稲田大学教授の仁戸田六三郎博士が、「葬式宗教とクリスマス宗教」なる一文をものして、現代宗教への疑問と銘を打っている。これに対して、代々木教会の赤岩栄牧師——かつて赤い牧師として有名だった——は早速読売「各界交流」欄に反論をのせている。これは、先の友松・福井の対戦とは少々角

度のちがった対戦であるが、その本旨とするところには大した変りはない。

仏教の側からも、きっと誰かが名乗りをあげるることだろうが、今日のところではまだいいし、本誌の締切も迫っていることだから、これは割愛することとして、以上、二つのコンビを眺めると

保守 革新

福井——友松

赤岩——仁戸田

といったスコアになる。

寺院がガラン洞の本堂をかかえて眠っていることはいけないという友松師。いや眠っているんじゃない、ただ静かにしているだけであり、人の心を仙境に誘い込んでくれる

魂の休息所の役目をしているのだというのが福井博士。この勝負はどうやら、友松師の判定勝に終わったようだが、どうだろう。

次の対戦では、現在の仏教は葬式屋、キリスト教は結婚式屋にすぎない。人工衛星の飛ぶ現在の大衆にとっては、もはやお念仏も天国も全く無用のものになってしまった。宗教が将来に脱皮するには、どうしても現実在即したものにしなければならぬ。これが、仁戸田先生のいわれるところである。仲々、歯切れのよい啖呵を並べておられる。これに対して、赤岩牧師は、宗教、ことにキリスト教はそんな上っ面のものではない。人工衛星が飛び出したとか、原子力発電で船が走ったとかといっておどろいては、キリスト教でも何でもない。どんなものが出て来ても平ちやらである。何故なれば、ものは色々に作られ、どんどん変って行くが、そのものを作り出す人間は、依然として「死」を背負って生に苦しむ一個の罪人であるにとどまり、こうした「人間」の魂を救うのがキリスト教なのだ。だから、時代の流れに乗るものではなく、時代を大きく支配するものなのだという。まことにごもっともな言い分である。

ところで、話はいよいよ本筋に入る。

まず、伽藍である。がわばかり大きくて、中味の無いのを「がらんどう」というくらいに、お寺の本堂は、世間の人からみると、全くのがらんどうにみえるだろう。せまい島国に、一億に近い人間がウヨウヨしている日本で、がらんどうが転がっていては、いやでも目について、文句もいたくなるだろう。そんなものはつぶしてしまつて、アパートにでもするか、共同集会所にでもしてしまいたいだろう。ソ連では、教会の多くが博物館や養護施設に転用されているとのことだが、それもまたむべなるかなである。

今のようにならば、何事もすべて、実利、実用で割り切つてしまえば、こうなるものもやむを得ぬかもしれない。そうした、無駄をはぶいて他に利用して、坊さんは町に出て、青天井の下で辻説法をすればいい。渡辺照宏氏著わすところの「日本の仏教」(岩波新書)では、昔からのえらい坊さんを、四つの部類に分けているが、その中で、一番えらい坊さんは、行基とか道元とか一遍とかといった、仏教ずばりでなく、橋をかけたり、病人を治したり、貧民を助けたりして、大衆の中にとび込んで行った部類の人々であるとしているようである。いくらえらくとも、金襴の袈裟にくるまつて、本堂に坐っていてはだめであるというのである。これもまた御尤も至極なことである。がらんどうの中の置物

は困るというわけだ。法然上人はその生涯を通じて、ただの一軒も寺を建てなかった。友松氏はラジオでこう叫んでいた。道元禅師は、大名や金持を嫌って、百姓の中に入って百姓禅を唱えた。みんなえらい坊さんである。

何だか、私も友松・仁戸田組みたいなことになって来たが、たしかに、こちらに賛成する気分が、一部分はある。だからといって、伽藍はがらんどうだときめつけて、無用の長物としてしまうことには賛成し切れない。世の中には、何でもかんでも、すべて便利に、実用化してしまいきれないものがある。無用の用ということがある。人間の体にも、まだ盲腸があったり、顔にひげが生えたり、お尻のとんがりに尻尾の名残りがくっついていたりしているのである。無駄をはぶけというならば、まずこれを片づけなければなるまい。

伽藍を盲腸や尾底骨にたとえることは、いささか不穩当かもしれぬが、理窟はそうである。たとえ無駄でも無用でも、それを別の角度からみなおせば、立派に役に立つものである。福井教授のいわれるように、世智辛く、毎日をあくせく暮している人々の、魂の休息所といったセンチメンタリズムも一応は御尤もであるが、それにもまして、

仏教というものを修業の道程と考えるなら、伽藍は、なくてはならぬ修業の場なのである。友松先生のように、もうすでにえらくなってしまった方や、仁戸田博士のように、外がわからの仏教傍観者ならいざ知らず、世に生きる大部分の坊さんは、今なお「上求菩提 下化衆生」の期間中である。目下「営業中」なのである。だから、どうしても仏道修業のための「場」が必要となる。アパートに化したお寺の一室や、博物館となった本堂の一隅では、静慮冥想するにはちと具合が悪い。また、弥陀の慈光を思念するには、どうしても、森閑と静まった本堂に、本尊仏と対座する方が都合がよい。今いる坊さんが、全部悟りを開いてしまったなら、それこそ、本堂はがらんどうになっても構わないだろう。

釈尊在世のインドには、祇園精舎、竹林精舎をはちめとして、幾多の修業の場があった。

仏弟子はむろんのこと、釈尊御自身すら、ここに住まわれて思念の生活を送られたのである。

赤岩牧師もいつている。キリスト教は世の中の流れに随順しはしない。そういった意味では、逆に、反時代的なのだと。味合うべき言葉である。どうも、近來の思想では、世の中の移り変りのことばかりにとらわれて、その移り変

りの根もとにあるものが忘れられている。即ち、移り変って行く方向の是非については何もいわないで、変ったという事実だけをとりあげて、世の中が変ったんだから、仏教も変らなければいけない。こうおっしゃるのである。これでは世の中の風まかせの仏教であり、キリスト教であり、宗教でもある。世間が「仏教なんていらぬ」とおっしゃれば「はいそうですか」と消えてなくならなくてはならぬではないか。そんな、へっぴり腰の仏教なら、明日といわず、今日の日からでも消えてなくなった方がいい。

釈尊はそんな積りで仏教をお説きになったんじゃない。永久に変わることのない真実の教えを残さされたのである。

時代が変ったから看板のぬりかえをせねばならぬといった、そんな田舎芝居みたいなものでは決してない。

大体、今の人々は、マス・コミだとかマスプロ制だとかいって「マス」——大衆を過大視して、恐怖症にとりつかれているようである。「数の暴力」ということが、民主政治の一大欠陥であることは明かである。みんながそういうんだからといって「数」の前に頭を下げてしまう。昔は「泣く子と地頭」だったのが、今日では「マス」に代ったのである。ところが、その大衆たるや正しいかという、さにあらずである。時に随分無茶なことも、大衆という名で「与

論」という看板で、無理やりに押しとおすことが多い。戦争、ストライキ、革命、暴動、そのすべてが正しいとは決していい切れない。むしろそれは、無暗やたらに前進する盲目の群集の場合が多い。仏教がいくら時代性を尊重せねばならぬからといって、何でもかでも、時代におくれぬようにとばかり、どこへ行くのかお先真暗なマスの尻馬にのすることは、どうしてもいただき兼ねるのである。赤岩牧師が、キリスト教を反時代的といったのは、きつとこういう意味なのである。それと同じく、仏教もまた反時代的であり、むしろ超時代的であらねばならぬわけである。

伽藍を、外がわから眺めて、中味がないとか、その中で眠っているとかがということとは、一応、批判としてはうなづけるが、宗教とか仏教とかというものは、五十年や百年、五百年や千年の世の中の変化に目をまわして、あわてふためくには当らないであろう。

少し乱暴ない草だが、伽藍のがらんどおとした真中で、悠々と春眠を楽しんで、こんなこせこせした時代の通りすぎるのを、ゆっくり待つことを提案したい。

浄土歌壇

岩野喜久代選



天

兵庫 野口かずえ

牡丹咲く春の待たるるその頃に一人の姉の母となるゆえ

評 明るい素直な歌、よろびに溢れた妹の心が牡丹より一足先きにふつくりと開いている。

地

相撲みるテレビの前の人だからその外側に風と加はる

神奈川 熊坂 満

評 結句で、三月の風が巷を吹きまくっているのが想像されるが、相撲ファンにとつては春の突風も物かは、塵埃を浴びて、往來に足をとめテレビに見とれるのである。

人

青森 向井きつ

水がめに入る水音の絶え間なく生ける宝と日覚めて思ふ

評 咽井戸の水が、笕の水が音をたてて甕の水がめに流れ入るのを晩の目覚めにきた作者の感動で、敬虔な態度を貫きき。

福岡 阿部キヨ

賜はりしこれの林檎のほの甘き香りは母の体臭に以て

大阪 山村 綾子

お水取り冷き風は吹きあへど木々の本の芽のひそみふくらむ

石川 神徳 凱一

山一つ春をさへぎり北国の雪深き溪淡雪のちる

東京 星野 千代

紅梅の咲き匂ふもと手作りの小松菜そろふ我れの半日

名古屋 堀江 真鯉夫

満開のさくららの下に読書してまどろみ眼さむ身に花吹雪

神奈川 中里 史子

くろぐろと雨を吸ひたる庭の面に眼にしむごとき若草のいろ

東京 上野 常也

村里の名残りただよふ露地ごとに梅のかをれり三鷹の町は

神奈川 張山はるみ

嫁ぐときかされしまま別れ住み今髪うすき友を見守る

千葉 瀧美玉枝

牧草を刈りとりて行く馬の背のときにきらめく冬の葉暉に

東京 無藤よね子

十年ほど日を省みてわが姿いたはる折の身に病あり

熊本 法・製婆男

噴煙の見ゆる園まで歩み来て雲雀の声を遠く聞きをり

福岡 吉末 真竜

初めての五千円札うつくしき手に出さるるを窓口に見つ

富山 星野 民

裸夫一人水に飛び入りやや暫し出づれば溪の魚撫み居り

東京 川辺 ぎ子

わが着るは明日に迫りぬ大針に人の仕立ての済みてより縫ふ

松江 吉田 弘道

浄水の仕事につきて四十年老職長の面のかがよく

仙台 一迫 春子

こころまづ春立つごとし語りつつ友と歩める雪どけの道

東京 小宮 みち

八十年世を経て病めば何がなし尊きものに思はるるかな

松坂 石島 雅弘

ひたすらに南無とすがりて合す掌に如意得させんの大悲の姿

山形 佐藤 諦観

親を思ふ心にまさる親心わが身わすれて子を守るなり

東京 葛岡 利子

春なれや子の揺りかごにちちと寄る雀のありて我れもうつらに

和歌山 中川 誠一

吹雪く夜の宿なきままに恵まれし一夜の情我れ忘れんや

小田原 加藤 栄造

寒き夜は人恋ふものかかのバーの女妖しく媚びて寄り来ぬ

東京 菊地 美夫

東京の開祖の像の道灌をぬらす二月の宵の雨かな

神奈川 大坪 ったえ

雪ならば払はれもすれ雨となり友と退け時を傘なくて出づ

選者 詠

三月を待ちかね樺木つぎ木するよき生命を産む思ひもて

渡 辺 海 旭

カルピスという飲みものがあるが、これはカルシウムと梵語のサルピスという言葉が結びつけられて、カルピスという名前がつくられたと聞いている。サルピスというのは「醍醐味」という意味だそうである。このカルピスという言葉が、「初恋の味」という宣伝句で売り出されて流行したころ、それは何となくロマンな味と香りをおもわせ、モダンな時代の先端的なひびきを感じさせたものであった。このカルピスの命名者がなんと海旭師であつたというのである。

わたくしは、このことを思いだすごとに、いつも師の人となりの一面を彷彿と感ずるのである。カルピスという言葉は、サルピスというインドの古い言語がよく生かされて、そ

の当時の人びとのところをとらえたのであるが、丁度そのように、師の胸中には、古き聖者の行履が強烈にやきつけられていたことであらうが、外にむかつては時代に相応したふるまいをして、それをよく生かしていくといったふうの闊達自在であつて豪放な人からのもち主であつた。

しからば、このような人となり、あるいはシンシの気性はどのようなにして磨かれ育まれていったのであろうか。

師は、明治五年一月十五日、東京浅草の渡辺啓蔵氏の長男として生まれた。幼きころに厳父を失い、温い母親のもとをはなれて博文館の店員となつて働いたが、十四歳のときに小石川深覚寺の端山海定師について得度し

た。明治二十年、十六歳のとき、浄土宗東京支校に入学、さらに二十二年には浄土宗学本校に進み、二十八年七月には優秀な成績をもつて卒業した。卒業ののち直ちに第一教校の教師となり、かたわら浄土教報の主筆として、また雑誌新仏教の同人として教界の第一線に立つて縦横に活躍をとげたのである。

この「新仏教」の同人たちは、旧仏教に対して新仏教を提唱し、教権主義に対して、あくまでも自由討究と批判とを主張して、もつとも革新的な運動を展開したのであつた。師の生涯を貫いたところのこの気性と、人生に対する確固たる信念は大概この運動を通して得られたもののようである。

明治三十三年五月、第一期海外留学生としてドイツに渡つた。かの地では、ストラスブルグ大学において、主としてロイマン博士に師事し、サンスクリット、パーリー、チベツトなどの各語を研究し、これらを基礎として比較宗教学の研鑽をかさねたのである。滞独すること十二年にわたり、その間いくたの貴重な研究論文を発表し、とくに「普賢行願讃

諸本の比較研究」は、ドクトル・フイロソフ
イーの学位をあたえられた。また、欧米の各
大学に招かれて、仏教哲学や印度学などを講
じ、対外的な活動をなして、大いに東洋の宗
教、文化を西洋に伝たえ、交流の先驅をなし
たのであった。その功まことに顕著なものが
あり大いに讃えられねばならない。

明治四十三年三月帰朝したが、その後の師
の活動はまことに目覚ましいものがあつた。
直ちに、宗教大学教授に招かれ、翌四十四年
には芝中学校長に就任、さらに、東京教区布
教団長、増上寺教監、または浄土宗執綱とし
て、そのもてる卓見と英才はひろく各方面に
および十二分に發揮されたのである。

また社会事業という言葉の名づけ親も海旭
師であつた。仏教徒としての社会事業の指揮
者であり先驅者であつて、時代のながれに応
じ大衆の要求に即した社会事業の研究と指導
にあたり、惜しみなき援助をあたえたことを
みるとき、実践家としての面目をよくうかが
いしれるのである。

かつて、師がドイツに留学するとき、その

出発に際して雑誌「新仏教」の費用にといっ
て、金拾円を寄付したことがある。当時の拾
円は相当の値打ちがあつたもので、同人の一
人が、帰朝してからでも寄付したらといった
ら、「僕は結婚しないから、簡易生活ができ
るので……」といつて寄付したといふのであ
る。このように金銭に対する淡泊さは生涯を
貫いた師の人徳とでもいえよう。お葬式に出
かけていつてこちらから香奠を贈ったり、学
校の校長をしていて貧しい生徒の月謝を自分
が出したりしたことはしばしばであつた。

師が帰朝してから、友人が結婚についてす
すめたことがある。すると「女房をもらう金
があつたらそれで学生を養う」といつて断つ
たという。生涯独身の理由として「貧乏と勞
働者のために結婚する暇と縁と徳がなかった
のだ。僕は人間として失敗者だ」といったこ
ともある。それだけに、自分の門下生の結婚
のときなどは、喜び方といい、世話ぶりとい
い親身の者も到底およばない程であつた。西
光寺に永年寄宿をしている門下生が結婚した
ときなどは、西光寺の座敷の畳をすっかり新

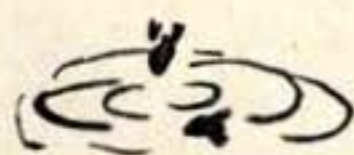
しくし、披露の料理献立から新居の指図、新
婚の挨拶状にいたるまで万事行届いた世話を
した。それに文藻ゆたかで結婚式の表白文を
よくつくり、また即席の挨拶はその妙をえて
いた。

このように終生妻帯せず独身にして律僧
の生活をつづけたが、といつて杓子定規式の
ところは全くなかつた。禁酒会の理事もつと
めていたが、肉類は好物でおよそ精進料理
むきではなかつた。新戒律主義を提唱したの
もただ単に形苦しい生活をおこなうためでは
なくして、律を遵法することによつて、あく
までも精神生活を健全ならしめるためのもの
であつたのである。

昭和八年一月のこと、暮から病床にあつた
が、無理をおして元旦の拝賀式に出席したが、
それがために病重くして不起の床につき、
ついに同二十六日、六十二歳をもって逝去し
た。

(宮林 昭彦)

中国綺談



牧尾良海

第一話

浮気な幻

東晉の時のことである。陽羨の人許彦^{きよひこ}が、綏安からのとある山道を歩いていたときに、ひとりの書生に出会った。年は十七八歳であらう、道の側に横になっていて、脚を痛めたので、許彦の携えている鵝鳥の籠の中へ入れてくれるようにと言うのであった。許彦は、冗談を言っているのだと思っていると、その書生は籠の中へ入りこんでしまった。おどろいたことに、籠は広くなった訳でもないし、書生がまた小さくなったのでもない。まるで二羽の鵝鳥と並ぶようにして籠の中に坐っているのだが、鵝鳥の方でも一向驚いている様

子もないのである。許彦は籠を背負って歩きだしたが、何の重みも感じなかった。

しばらく行ってから、一本の樹の根もとで休むことにした。すると、その書生は籠から這い出して来て、

「貴方に、少しばかり御馳走致しましう。」

と言った。

「それは有難いですね。」

許彦が言うと、その書生は、口の中から一つの銅製の重箱を吐き出した。重箱の中には色々な御馳走が詰まっていて、山海の珍味が沢山にそこへ並べおかれた。器や皿などは、何れも皆銅製であった。食べ物、その香りといい、味わいといい、芳ばしく美しいもので、世にも珍らしいものばかりである。酒も

何本か出された。酒を飲み始めると、書生は許彦に向って、

「まえから、女が一人ついて来ていますので、少しの間、ここへ迎えようと思いますが。」と言うのである。許彦が、

「そりゃあ、一段と結構じゃないですか。」と答えるや否や、書生は、口の中から一人の女性を吐き出した。年のころは十五か十六というところで、着物もうるわしくきらからかで、絶世の美貌である。この女もその宴に加わった。

そのうちに、俄かに書生は酔いがまわったらしく、そこへ臥せてしまった。すると、この女は、許彦に向って、

「妾、この人と一緒にはなっていますけれど、実はあんまり好いてはいないのです。まえからそつと男を一人連れて来ているのですが、この人がすでに眠ってしまいましたから、ちよつとその男をここへ呼び出しますゆえ、どうか内緒にしておいて下さいませ。」と頼んだ。

「宜しいですとも。」

許彦がうけあうと、その女も自分で口の中

から一人の男を吐き出した。二十三か四ぐらゐの年恰好で、聰明そうな魅力のある若者である。この若者は、許彦にもちゃんと挨拶をした。ところが、寝こんでいた書生の方が眼をさましそうになったので、その女は口から錦を張った屏風を吐き出して、若者を隠した。それから、書生に呼ばれて、一緒に寝に行つた。一方、吐き出されたその若者は、許彦に、

「あの女は、情は深いのですが、私はどうも心底からうちこめないんですよ。彼女には内緒で女をひとりつれてゐるんですが、今、ちよつと会つて見たいと思います。どうかこの事をあの女には言わんでおいて下さいませんか。」

と頼むのであつた。許彦は、仕方がないので、「分つていますよ。」

と答えると、その若い男は自分の口からは、たちばかりの女を吐き出して、女と一緒に飲んだり食べたりして、長いことふざけたわむれ合つていた。そのうちに、例の寝ていた書生の身動きする気配におどろいて、若者は、

「あの二人が、もう眼を覚ましますよ。」

と言うと、自分が吐き出した女を又口の中へ還して、呑みこんでしまった。

間もなく、書生と寝ていた女が屏風の向うから出て来て、

「あの女、起きて来ますわ。」

とて、自分の吐き出した男を呑みこんでしまふと、そのまますまして許彦と向いあつて坐つた。書生は、やがて起き上つて、許彦に、

「つい、ちよつとの間と思つて横になりましたのに、大分長く寝た様です。貴方はおひとりきりで、随分と退屈なさつたでしょう。もう暮れがた近くなりましたから、貴方ともこれでお別れ致しましょう。」

と言うと、そこにいた女を呑みこみ、それからその辺りにならんでいた色々の銅器類も皆再び口中へ納めてしまった。ただ、二尺角ほどの大きさのある銅の容器だけはそのまま残しておいて、別れしなに、

「貴方には、なんにも進呈する物とてありませんから、これを記念に取つておいて下さい。」

と言ひ添えて、許彦に呉れたのであつた。のち、太元年間に、許彦は蘭台令史の職に

仏教ものしり帳

しきび

仏前、特に墓前に供える花はシキビがふつうである。時にこれによく似たアセボというのも用ゐることにしている。シキビにせよアセボにせよ青葉で大体一年を通じてある。それに枯れることも遅い。此頃は菊やカーネーションやその他色花を供える人も多いが、これは季節によつてある時とない時もあるし、値段も高い。仏教ではなるべく質素にという心がけから、いつでもやすく手に入るものを用ゐることにしている。一番いいのは自分の家の庭に咲いた季節の花を上げることである。

就いたが、何かの折にその銅盆で待中の官の張散に給仕したとき、張散はこれを珍らしがつてその銘を調べたところ、漢の永平三年の作と記されてあつた。

(続斎諧記より)

第二話

碁神の女

唐の玄宗皇帝が、安祿山の謀叛のために南方の蜀へ蒙塵せられたとき、宮廷の文武百官たちは、みんな慌てふためいて、帝の行在所へとあとを追ったのであるが、翰林院出仕の囲碁の名手・王積薪も、この人たちと一緒に避難行に加わっていた。

蜀へ通ずる山道は、大そう狭隘であった。

途中で休息をとる時、街道筋の宿駅や一般の人家は、大てい大官や要人連に占有されてしまふのがおきまりで、今日も今日とて王積薪は、あちらこちらと探し歩いたが、一夜の宿をとる所が何処にも見つからなかった。仕方がないので、ひとすじの谷川の流に沿いながらかなりの奥までさかのぼって行き、そこでやっと一軒の老婆の住居を見つけて、泊めてもらうことになった。

この家には、老婆とその嫁という女とが二人きりで住んでいた。彼にはただ簡素な食事を仕度してくれただけで、格別構ってもくれ

るでもなかった。あたりが暗くなると、その老婆と嫁とは早々と戸締りをして、やすんでしまった。王積薪は唯ひとりで簷下に横になったが、夜ふけになっても眼が冴えて、なかなか眼りにつくことができなかった。

と、突然に、屋内の老婆が嫁に話しかけている声が聞えて来た。

「こんな静かな・良い晩なのに、何もひまつぶしの所作が無いねえ。どうだね、碁でも一番やってみようかね。」

「そうですねえ、ひとつお相手をしましうか。」

嫁が答えている。王積薪は、心中、これは珍らしいことだわいと思った。家の中には何のあかりとでもないし、おまけに老婆と嫁とは、部屋が東西に離れているのである。どうして勝負をするのであろう。彼は戸の所に立って、きき耳を立てつつ様子をうかがっていた。

俄かに嫁の声がした。

「東五、南九の所へ一つ置きましたよ。」

老婆がこれに応じて答えた。

「そいじゃ、私はね、東五、南十二の所へ

扉の御法語

「持戒のものの念仏の数遍のすくなきと、破戒のものの念仏の数遍のおほきと、往生の後の位の浅深いかが候べき」と、禪勝房が上人にお質ねしたときに、上人の答えられた御詞の結句が扉の御法語です。この禪勝房に示された御詞は、勅修御伝第四十五に多くありますが、これもその中の一つです。

ただし、禪勝房の「持戒と破戒」の質問には上人も少々かんにさわれたのでしうか。上人は質問に答える前に、いきなり畳をさして、畳が破れているとか、破れていないとか議論するのは、畳があるからで若し畳がなかったら、破れているとかいいたのかの問題がないと申されました。

つまり末法の時代になって、持戒とか破戒とかの問題はあり得ないではないかというのです。ここで末法というのは、社会が悪いとか、正法がすたれたとかの比較的な意味ではありません。御承知の通り釈尊滅

置きますよ。」

嫁がまた言った。

「今度は、西の八、南の十に置きました。」

「私は、西の九、南の十へ置いたよ。」

これは老婆の方である。

石を一つおろすことに、この女たちは随分長いこと考えては勝負を進めていた。夜も段々に更け、やがて四更もつきようとする時間になった。王積薪は、彼女たちが前後しておろした石の形勢をすっかり覚えていたが、みんなで三十六個になる勘定であった。突然に老婆の聲がした。

「さあ、これでお前さんの負けだよ。私もたった九目しか勝てなかったよ。」

嫁の方でも、負けを認めた返事をしていた。夜が明けてから、王積薪はすっかり身仕度を整えて、二人の婦人に一手の教えを乞うてみた。

「貴方が、御自分で思う様に局面を勘考なさって、碁石をおいてみて下さい。」

と老婆が言うので、彼は早速、旅囊の中から碁盤をとり出して来て、平素の秘手妙手を尽しながら石を置いて行つた。まだ、ものの十

個と布石しないのに、老婆は嫁の方を見返つて、

「このおひとには、普通なみの進め方で教えてあげる方がいいよ。」と指図していた。

そこでその嫁は、いかに攻め、いかに守るか、或いはまた、危くなつた折の救い方、防禦の方法などを教示したが、まことに簡単であつたりとしか教えてくれなかつた。彼が今一段の説明を頼むと、老婆は笑いながらこう言つた。

「ここまですで止めておいても、世間にはもう貴方の敵手は居りませんのじゃ。」

王積薪は、鄭重に彼女たちに礼を述べて、その家を辞去した。

この時から以後というもの、王積薪の碁のうでは益々洗練を加えて、遂に天下無敵となつたのである。彼は、あの夜覚えておいた老婆と嫁との対局を碁盤の上にならべてみて、苦心惨胆して考えてみたが、老婆の方が九目勝ち越したという、その理由はどうしても判らなかつた。彼はこの局面に「鄧艾蜀を開くの勢」という雅名をつけて呼んだのである。

(集異記卷一より)

後の五百年が正法で、その後の千年が像法の時代であり、これが過ぎると後の一万年間が末法です。従つて釈尊滅後から千五百年以上が経過したということ、一つの年代を表わすもの、時代の経過をいう言葉であつて、誰がいいとか悪いとかで申す言葉ではありません。

「このうへは持戒破戒の沙汰あるべからず」とお叱りになつたのは、末法にその議論があり得ないという憤然たるものを感じます。禪勝房が「持戒の者なら、お念仏の数が少なくとも」といいたいように感ぜられ、自分は他より優れているとの自負心があつての質問と思われたからです。

そして「ただいそぎでもいそぎでも」と言葉極めて、「名号を称すべし」と申された一句は、言葉の強烈さから、身のしまるのを憶えます。

この禪勝房は、遠江國の人で天台の学問をされた人ですが、上人の教えをうけてから、国にかえり、大工を職として世を渡りました。

効き目のなかつた

「板 ま ん だら」

デラックスばやりの今日、新興宗教のデラックス「創価学会」の会長が亡つた。四月二日、のことであつた。そして皮肉なことに、四月八日、花まつりの当日が初七日で、密葬を行った。もっとも、創価学会では、おしやかさまはぬけがらだといつていたから、花まつりも降誕会も関係がないということなのだろう。

からの理窟は何とでもつくが御主人も予期せず遺言もなしに唐突と逝いたことは、個人的にも教団にとつても、これは最大の不幸といわなければなるまい。ひらの会員ならとに角、日蓮大聖人に次ぐ生仏と思われていた人の、この突然の逝折は、学会員にとつてはおどろきであるとともに、深い不可解さを伴っていると考えられる。

ところで、ひとの一生のうちで最大の不幸は何かといえは死ぬことである。ほかのことは、人の手で何とか出来るが、死ぬことばかりは何ともならぬ。幸福製造機の「板まんだら」を一生懸命押んでいた、その肝心な一番の人が五十八歳で長逝した。五十八歳といえは此頃ではまだまだ若い。それに、こうした方面では、むしろこれから段々円熟して、

滋味のあふれて来ようという年令である。後

人間一度は死ぬものながら、普段の言動と特有の信仰から割り出してみると、何かそこに割り切れないものが残つていように感じられる。数団幹部の人々は、そんなことより、會長亡きあと、いかにすべきかという現実問題の方が重大であろうが、素朴な末瑞の会員にとっては、今回の会長の死には何としても、うづなき切れぬものがあるにちがいない。

人の不幸をとや角いうこは慎しむべきであ

ろうが、しかし、今までの戸田氏の、あの自信たつぷりな、言動を思い浮べてみると、私共局外者でも、なつとく出来かねるものが感じられることは、やむを得ぬだろう。

そこで問題は今後学会がどうなるかということにある。去る者日にうとしとか、次の會長が決まって、一応の落ちつきをとり戻せば、戸田會長のことは忘れられてしまふだろうが、ここで問題になるのは、新興教団全体を通じての特長たる「教祖主義」の問題である。教祖が現実に生きているところに、教団の強味があるのだが、それが亡つた場合どうなる。メシア教の場合が一つの例として考えられる。教団は大分裂し、教祖夫人を教主として旧地にたてこもつた現在の世界教世教は今日ではわずかに美術館経営にからくもその体面を保つにすぎない。水ぶくれ、頭打ちと一種の危機状態に来ていた創価学会の場合、内部の混乱が懸念される。ことに、大幹部と称する人々は、いづれおとらずに鼻いきの荒い、人と協調しにくい連中だから、會長なしの合議制はのぞめまい。

内部問題のほか、もう一つある。日蓮正宗との関係をどうするかということである。庇をかして、母屋をとられかけていた正宗としては、ここで何とか手を打ちたいところではないだろうか。会長、管長の二本建てが、いつの間にか、会長独裁になってしまったのだから、この際、管長の発言力を強め、出来れば管長即会長なんという夢も描きたくなるだろう。在家主義と出家主義との協定の破綻もまねきたい現状である。

予測は色々に立てられるだろうが、ふりかえって、己れをかえりみるこれが此際、何よりも、大切である。中外日報には佐木氏、増永氏、その他の人々がこうした意味で、既成団の再覚醒をうながしておられるが、正に、そのとおりである。真実にめざめるチャンスが来たのである。これをチャンスとして、宗教界が本然の姿に復し得るならば、仏となった戸田会長も、或る意味で喜んでくれるのではないだろうか。

実話 絵師と横綱

寛政の三力士と言えば谷風、小野川、雷電を言う。

その谷風が京都場所中、時の名画工応挙と懇意になった。

「一つ何か絵をワツシに画いてくださらんか」

と、或る日、谷風は応挙にたのんだ。

「よろしい。だが只ではいやだ」

「承知しておりますとも。充分にお礼金を進ぜよう」

「いや、金は欲しくない。わしも画師として精一杯の仕事をするのだから。あんたも力士として精一杯のお礼をして欲しい」

谷風は承知して応挙宅を辞した。

四日程たった。ある朝、応挙の門前でさまざまの地ひびきがした、とびだしてみると、マワシだけの裸形の谷風が大きな石をおいて肩で息をしていた。

「先生、庭石に一つ。この二三日鞍馬の

山をかけめぐってやっと心になうこの石を見つけました。人手を借りずにこゝまで運んできました。相撲取りの出来る精一杯のお礼でござす」

応挙は大変感激して、この誠意のこもった贈り物を受け取った。

だが応挙はいままで経っても谷風に絵を与えようとはしなかった。三月、半年、とうとう一年が去った。再び京都場所をつとめるため谷風は江戸を発った。

ある日、谷風は応挙を画房に訪れた。

「先生、絵はどうなっておりますか」

応挙はニヤリと笑ってから谷風を仕事部屋へ通した。そうしてすでに百枚にも及ぶ画き損いの絵を見せた。谷風は感心した。

「先生絵はもうよござんす。その画き損いを一枚下さらんか」

「こんなものは……」

「いや、それこそ一番ありがたい絵です。弟子共のはげみになりましたよ」

と言って谷風は応挙の画きつぶしをありがたく貰って帰った。それから五年も終つて絵は完成したと言うことである。

鎌倉礼讃

— 英勝尼寺 —

石上善応



鎌倉と云えば誰しも思い出すのは美男にお
わす鎌倉の大仏であり、三祖上人の光明寺で
あろう。事実、私たちには忘れ難いわれを
もっている。だが、これのみが鎌倉のすべてで
もない。若宮大路を闊歩したであろう源氏や
北条の武將を何も思い出さなくとも、鎌倉と
いう言葉から、鎌倉という土地の大地から、か
もし出されてくる雰囲気そのものが、私たち
を引きつけずにはおかなくなるのであろう。

全く四季を通して鎌倉は情緒たつぷりであ
り、不思議にも私の足をフラフラと誘う魔力
を蔵している。もう何度、足を運んだことで
あろうか。しかも浄土に關係する古刹は一、
二にとまらない。大仏、光明寺を初め、九品
寺、安養院、長谷の観音、極楽寺等、すぐれ
たる彫刻どもの寺宝とその歴史は、忘れよう
としても忘れることのできない大きな遺産と
して、私たちに迫ってくる。

これらの古刹の中で、一風変わった趣きを見
せてくれるのが、この英勝寺であろう。浄土
宗であるのみならず、鎌倉としても現在残っ
ている唯一つの尼寺でもある。

英勝寺はこよなく優雅でもある。梅がよけ
ればよいで何も英勝寺に限らない。東慶寺、
光則寺、瑞泉寺などの代表のお寺もある。だ

が、歴代尼寺で通ってきたこのみ寺の良さは、
武家の鎌倉と違った風趣を持っているためか
も知れない。

英勝寺を訪れるのには、北鎌倉から長寿寺
わきの扉谷の切通しを通り、上杉邸の跡を過
ぎて、五山の一つ寿福寺の北隣に接している
このみ寺にくるのが最も趣きがあるようだ。

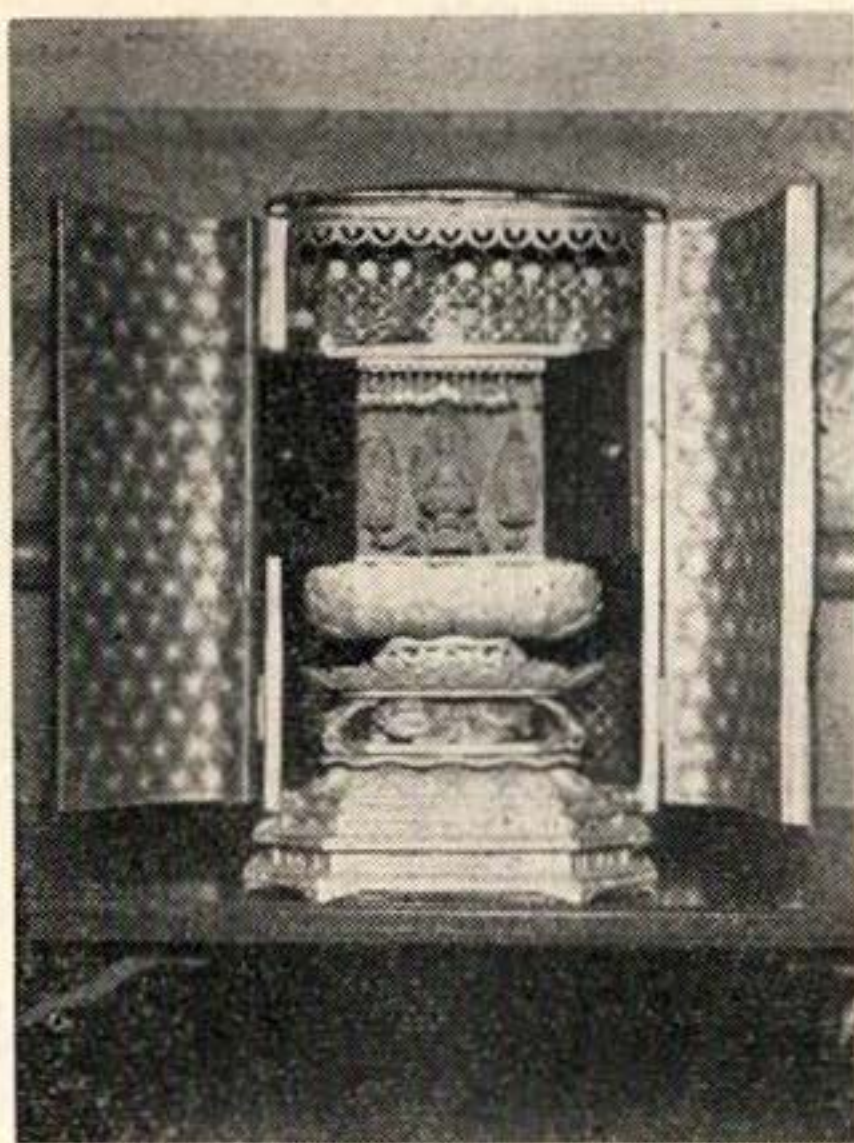
東光山英勝寺は寛永十一年、水戸徳川頼房
の母英勝尼の創立になる。英勝尼は太田道灌
四代の孫、太田康資の娘で、家康公に仕え、
お勝の局と言われたが、家康公の命によって
頼房の准母となられた。禪尼は家康の歿後、
薙髮出家し、家光より道灌公の故地を賜わり
ここに英勝寺を創建したのである。

境内はさして広くはない。こじんまりとし
ているが、歴代上人の墓地や山林を含めれば

かなりの広さをもつという。

総門をくぐって山門趾に立つ。仏殿が可愛らしく目の前に鎮座ましまして。左手が有名な英勝尼の祠堂である。当時の山門はその趾から知ることができるよう確かに素晴らしいものであったろう。だが仏殿を眺めるには山門のない方が広々としてよい。山門があれば仏殿は狭苦しく目に映るような気がする。案内を請うとすぐに御住職がでてこられた。仏殿、祠堂、書院、庫裡、いずれも皆独立していて、つながっていないから、尼さん二人のお寺としてはさぞかし大変なことであろう。いつ来ても掃除が行届いているのには、一掃除、二勤行、三学問の僧侶生活として当り前かも知れないが、ただく感心させられるだけである。一日怠ればそれだけ目につく、実際掃除は隠すことのできないものだ。一朝一夕に庭の清浄さができ上るものではない。お寺はいつ見ても、一体いつ掃除をしたのだろうかと不思議な気持ちにさせる位、毎日が清浄でなければならぬと私は教えられてきた。竹箒のはき目を見て、小学校の頃の四時起ききの掃除をなつかしく思い出させてくれる。

仏殿は珍らしく石畳である。導師と維那の坐るところだけの席がポツンと石畳の上に設けられてある。天井の彩色はまだ鮮明な色合いを見せている。本尊の来迎の阿弥陀三尊は寺伝によれば運慶の作とか。仏殿の両横には当時の大方丈や山門にでもあったのか、その



返って狭苦しさを感じさせない平凡さが私には快い。暗さというものを持たないお寺だ。石畳の印象も悪くない。これとよい対象をしているのが祠堂であろう。外囲いをして外観できないが、二坪ばかりの祠堂は彩色も鮮やで徳川時代の流麗な芸術を見せようと、箔の

面影を偲ぶに充分な阿弥陀、観音等の諸仏が雑居しておられる。ここは仏殿の構成の美しさだけを目に留めておきたい。十二支を刻んだ蛙股をめぐらし、寛永二十年の創建当時のままの姿が残されている。なんの飾り気もない仏殿が境内の広さともよく調和していて、

も知れない。仏殿との間で豊後梅が大輪を咲かせていた。

庫裡の後の墓地には、頼房の娘玉峯清因を開山とする歴代上人の墓を中心に、整然と墓石が並んでいる。中でも目を引いたのは歴代のお墓より、仏・菩薩の姿が浮彫りされている

使いようと云い、彩色の施しように云い見事なものである。この祠堂に坐って外窓の来迎石仏三尊を背景に英勝尼の墓碑を拝むようになっていたのは、水戸家の人々の墓参のためによるものなのだろうか。仏殿に比して小さくはあるが何と華麗な建築であろう。こういう対象が別に不調和を感じさせないのは、祠堂が遠慮ぎみに作られたせいかもしれない。

る石仏群である。当時、このお寺に随伴した尼僧たちの碑であるが、それらが慎しやかに並んでいる姿が、えも言われぬおくゆかしさを含んでいるように見受けられる。その仏顔の一つ一つが当時の尼僧の顔であったかのようになさえ。

書院に通されて、いろいろ御住職からお話を伺えたのも各別の感興であった。実際、尼寺は優雅である。今迄、觀賞してきたどのお寺の雰囲気とも違う。この書院は昔の大方丈の趾に、大方丈よりはるかに小さく建てられたものである。昔の大方丈の趣きを知るよしもないが、私は今の書院の方をかいたい。別に建築的にすぐれてもいないし、とりわけ大きくもない書院ではあるが、お寺というものはやはり時代と共に生きて行くものなのであらう。

御住職がお内仏から出してこられた白檀の阿弥陀三尊はただ驚くだけである。なんと小さな、しかもなんと精巧な仏様であらう。橘夫人の念持仏を模刻したのかと思わせる。全長二寸もない仏像ではあるが、その精巧なことは舌をまくだけであらう。しかし只、精巧

なことが仏像の觀賞としてすぐれているとは言われない。精巧な宝冠の阿弥陀像の柔和なお顔は見れば見る程、拝めば拝む程、心の奥深く入ってくる。少くとも藤原時代の作と専門家に見られている。蓮座や厨子の飾も江戸初期のもので、仏像ともよく調和している。

わが庵（いお）のあみだ仏、ともしびものせず、花もまいらせず、すごすごとたたずめる、今宵はことにとうとき。 蕉村

この連体詩の一句そのものであらう。そう云えばこの書院に虚子の近作がかかげてある。伺えば毎月二度、虚子を中心として句会が必ず開かれていた。虚子もこの尼寺の雰囲気が好きなのであらう。梅と云い、青竹と云い、この書院に坐って庭木に見とれていくうちに、落着きが得られるのは私一人ではない筈だ。一句ひねろうという気持もおきてくるであらう。

尼寺の境内は一応塀垣はしてあるものの、一見、垣根がないように見られる。境があってもないような境内、私は何かお寺というも

のがこうありがたいものだと思わずにいられない。疲れた者に憩を、悩める者に導きを与え、お寺、それはいつでも入り易く、開放されていなければならない。

賀古の教信は西には垣もせず、極楽と中をあげあわせて、本尊をも安せず、……つねに西に向いて念仏して、その余は忘れたるがごとし。

という言葉の通りである。只、ここは西が源氏山、東が低地の横須賀線に接している相違はあるが、その大らかな気持はそのままに通じているであらう。

春雨が降りだしてきた。お彼岸も間近い。尼寺の住職の念持仏にふさわしい、優雅な阿弥陀三尊を暫くの間、眺め続けた。柔和なお顔は全く橘夫人の念持仏の本尊とイメージが重ってしまふ。しもぶくれのしたお顔は忘れ難い印象を植えつけてくれる。懇切なもてなしに只々お礼のみ述べて春雨の中を辞した。英勝尼はこよなく優しい尼寺である。

お経を現代語に

中村 賢

聖徳太子が四天王寺を建てられてから千三

百六十余年になるが、お経はいまだに中国で

ほん訳されたままである。徳川時代は朱子学

がさかんで、明治になってからも、一般に漢

字が学ばれ、お経も漢文流に読めば、大たい

の意味は判った。しかしお寺さんの読みかた

は呉音であるから、漢学だけでは聞いていて

判らない。近来神職の祝詞は、万葉朝がなで

あるから一般の人には読めないし、意味がは

つきりしない。古いものが尊いにしても、そ

のまま通していることもおかしいことであ

る。明治以後に興った神道各派はかな交りを

用いている。

現今は、仏典研究が進んでいるのだから、

お経を現代語に訳して仏前で読むことにして

もらいたい。これは大事業とは思ふが、各宗

で所依のお経だけでも各々ほん訳したらでき

そうである。直訳でもよろしい。お経を聞いて有難いことだと判るようになればよいのである。仏教のお経も神職の祝詞もよく考えてほしい。

勝願寺の森

新井 敬 貴

わたしは老木がめり／＼と音を立て、伐り

倒さるゝを見た。

わたしは老木のために念仏を申した。ただ

何となしに。

これは、亡くなられた吉田絃二郎先生が、

過し年に浄土によせられた山椿の終りの一句

である。

先年、勝願寺の老母様から、もう残り少なく

なった寺の大杉を本堂修理の財源の為に伐り

倒すから見に来て、との御便りがあったので

私の老妻も孫を連れて見に行った。已に万端

の用意が出来て倒す方向には激突をさける為

にそだやこものたぐいを沢山に積み重ねられ

てあった。倒す合図をかたづを飲んで見てい

たのである。やがてめり／＼と烈しい地うなりをたてて倒れた、居ならぶ皆々は眼を蔽い耳をふさいだ。その時である百雷一時に落ちたようにパツタンと音を立てて中途からたてにわたしたのであった。皆はアツと只驚くばかりであった。あゝこの大杉も永い永い幾百年を経て今日がその命数の終りの日であった、永く無事に雨風を凌いで来たのに。

私共が子供の頃は勝願寺は大森林をなして昼尚くらくこわくて通りぬける事の出来るのは余程の勇氣あるものでないと出来ない事であったが今は僅かに数本、それも若木となつてしまったのである。なんとさびしい事である。それでも私の十三歳で夭折した英雄という末子が小学校三年の頃学校で初めて詩のようなものを作らされた時書いたものは

勝願寺御寺の庭のどこ見ても木ばかり

という字をならべたのである。当時の模様がよくわかるのである。

老母様が今もたゆまず毎年杉や松の苗を植えておられることは、その心掛け誠に有難い事である。

◎ 蛇と斗う母鼠 ◎

「母の日」があつて何故「父の日」がないのだらうと質ねたら、父の日は一年中あると答える人があつた。父には自己があるが、母にはそれがないという人もある。とにかく生きるもののすべての母が、生命をかけて子供を守り育てる姿には、誰もが涙ぐむのも自然のことである。母雉が翼の下に子雉をかかえて、自分は野火に焼け死んでゆく話は、あわれにも有名な話である。

鳥やけものの母性愛の話はいくちもあるのに、父性愛のないのは、家庭をもたない悲しさかも知れない。古くは万葉集に山上憶良の父性愛は有名である。栗一つ喰べて子供を想う父性愛には誰もホロリとされる。梅沢純夫博士のご兄弟は、五人ともみな博士だし、東大慶大その他で活躍されている。このご兄弟は揃って武蔵高工の御出身だが、当時の入学試験の受験番号が、全部同じ四九八番であつ

た。これは岳父が、子供たちが入試にヨク入ルように縁起をかつがれて、苦心の結果、この番号を取得され、子供の合格を念じたためである。梅沢博士は、兄弟が同じように入試に合格したのは、この番号のおかげであらうと、岳父（医博）の苦心に心から感謝されているけれど、この言葉はいい知れぬ父性愛に対する感謝なのである。

さて、母鼠が子供のために強敵青大将と闘った話は、その何れも余り人に好かれぬもの同士だけに、奇怪なこととして今でも忘れられない。

田舎のこととて青大将は別に珍しくない。だけど長押にながながと横になっているのをみた時は、それが実に大きな奴だったので驚いたわけである。子供たちが騒いでいたが、蛇と聞いては誰でも嫌で、容易には腰をあげなかつた、騒ぎが余りに大きいし、蛇が座敷

越冬隊と神様

「極地では、肉体の故障よりも、精神のひずみの方がこわい。問題は、肉体の医学ではなく、精神の医学であつた」

先般、一年半ぶり南極越冬から帰つて来た隊員の一人、中野征紀医師はこういつてゐる。白一色の雪の世界に、男ばかり十数人の生活を一年以上もつづけるといふことは、普通の場合では想像のつかぬことであらう。明けても暮れても、雪と氷に閉ぢこめられて、同じ顔の仲間と、鼻つき合せての毎日では、大底の人間はみな変になつてしまふであらう。設備も、食物も、娯楽も、充分に準備されていたであらうが、問題は「精神」である。それでも、越冬隊の場合は、来年の三月には帰れるという、はっきりした目やすがあったから、まだ、耐えられたことだらうが、もし、そうした目安なしに、そんな生活をつづけねばならぬとしたらどうであらう。想像しただけで、心のはりがなくなつてしまふであらう。

に悠々自適されていたのでは放つてもおけない。しぶしぶ行ってみて、驚きもしあわてさせられたのは、実は長押の上で鎌首をあげている堂々たる姿ではなく、蛇の目の前に鼠が一匹うずくまっていたからである。

昔から恐しいときには身がすくむという。だから鼠が蛇ににらまれて気でも転倒して、身の危険から脱する力を失ったものかも知れないと思った。大勢で見ている前で鼠が呑み込まれたら、気の弱い者でなくても夢に位はみることとなってしまう。

そこで大声をあげたり、棒きれを振り廻したりして鼠を追い払う工夫をやった。すると鼠はチヨロチヨロと隅の方に逃げてゆくけれど、またまた蛇に向って進んでゆく。何しろ鼠と蛇では喧嘩にならない。いくら鼠の頭が狂ったにしても、蛇にかみつくわけではなかった。また不思議と蛇は鼠に向って鎌首こそあげてみせるが、とびついてはゆかない。

こんな具合で、鼠を部屋の外に追いだすのに苦勞したが、結局は鼠は姿を消した。

騒ぎが大きくなったためか、家人が頼んだためか、まあいずれにしても隣近所のたのも

しい青年が梯子を肩に、馳けつけてくれた。こうなればことは簡単である。青年が長押に梯子をかけて青大将をつまみ降してくれるのに手間はかからなかった。私もヤレヤレであった。さしもの騒動もこれで終ったわけである。

ところが例の好青年のアフターサービスというわけか、こんなものがありましたよと、青年が長押のうらからつまみ出すのを見ると、何んとこれが赤肌の鼠の子供であった。

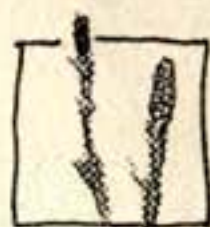
青大将は、ほんとは鼠の赤坊をねらったのかも知れない。なぜならなくなっていた青大将の腹の部分あたりに、鼠の子供が数匹いたわけである。

するとさっきの鼠は、その母鼠だったに違いない。逃げるに逃げられず、歯向うわけにゆかず、人間のおかげで青大将を監視することすらできなかった、あの母鼠は一たん姿をかくした後で、どんなに心を痛めたことであつたろう。

絶海の孤島に九年間、たった一人で暮したロビンソンクルーソーの物語は、少年の一度は受読する楽しい夢の世界であるが、いざ、現実に自分でその境遇になったとしたら、楽しいどころか、気が狂ってしまうだろう。事実、ロビンソンも、海岸に出て神に祈ったと書かれている。そうした、人間の精神が耐えられるギリギリの線に立つと、人は、いや応なしに神に頼らずにはいられなくなる。いわば、人間精神の最後の支柱になるものは、「神」をおいてほかにないのである。

越冬隊員が、神に祈ったかどうかは知らぬが、少くとも、日常当り前の生活をしている時とはちがった。何か、尊い、たよりになるものを攜んで帰って来たことと思う。

科学研究の最も尖端を先進するこれ等の人が、逆に、私共平常の生活をしている人間には味合えぬ。宗教的な体験をして来たということ——少くとも、人間生活において、一番最後まで人間を支えるものは精神力であるということを実感して来たということは、科学与宗教とが触れ合った、微妙な境地であるといえないだろうか。



老舗と行商

古くからあるお寺やお宮は、それぞれ、氏子や檀家という安定した地盤を持っているから特にあせらずとも、いわゆる老舗として、店を張って行ける。ところが、新興宗教は、伝統もなく、新しい勢力を、古いものの中に築き上げて行かなければならない。新しい信者を獲得するには、どうしても行商して歩かねばならない。時には押売りや、おどかしも出て来る。

「タタリ」と「パチ」

とをふりまわすわけである。

この頃は、この外に、デパートも繁盛しているのである。みかけは美しく、何でもござれで、病気はなおる、金は儲る、子供は利巧になる、嫁はやさしくなる等々と、一杯ビラがぶるさがっている。

買物をする方の身になれば、わざわざ、遠い所まで出かけて行って、古風な店構えの老舗で、不愛想な店員から物を買うよりは、何



ロマンスグレー

数少ない宗教評論家亀井勝一郎氏の人気は大したものである。一説には「藤村の現代版」ともいわれて、特に中年から若い女性に圧倒的人気がある。無論氏の犀利な知性の輝きによるものであろうが、それと共に、氏の頭を飾る房々たる髪、銀色に輝くのが目につく。

「ちよいとしたおぢさまよ」

近頃の銀座嬢の会話に洩れる言葉である。そういえば、本誌の生みの親真野先生も、また、近來頼みに筆力を発揮しておられる、且つ本誌に麗筆を揮っておられる増谷先生も、みな「ロマンス・グレー」である。その美しさには、時に、同性も亦みほれる事もある。成程、そう思ってみると、キリストも、マホメットも、孔子も、みな房々としている。敬愛のまとたる釈尊に至っては、ナチュラ・ウェーブで、その個性を誇っておられる。してみると、宗教の世界でも、矢張り、ロマ



中陰

◎中陰のいわれと年回の数え方

中陰というのは、新しく仏になられた方の、亡った日から七七四十九日までをいう。その数え方は、初七日丈けは亡った日から七日目、あとは一週間づつ六週間を数える。

四十九日までは、亡った人の魂が家の棟を離れず四十九日を経て、始めて成仏するともいわれる。それには次のようなわけがある。

毎度いうように、仏になるということは、普通には亡って此世から去ることをいうのだが、本当は、成仏とは「さとりを開く」ことで、この身このままが仏の心になることをいう。そして、釈尊がさとりを開いて仏になった時、自分が悟り得た心持をどのように、一般の人々に説き示めしたらよいだろうか、と、色々に考えをめぐらされた。一週間、二週間、そして三週間と、沈思黙考して、その方法を考えられ、そして一週間ごとに、段々とその意味や方法を深めて行って、七週間に

でも揃っていて、おまけに綺麗な女店員が、愛想よくしてくれるデパートへ行く方がよい。或は、買物に出かけようにも、急がしくて行けぬといった時、台所口から包をさげて入って来る行商があれば、品は少々悪くとも、当座の間に合えばいいといった気で、ついつい墓口をあけてしまう。

老舗には、それだけの風格もあれば、品質の吟味も済んでいるのだから、買っても決して損ではないのだが、何分にも、専門店なので、品種が少い。ピンからキリと云う訳には行かない。それにお値段の方も、仲々馬鹿にならぬ。従って、余程の通人か粹好みの人でないとなじめないということになる。

信仰は売物じゃない。などといっている、それこそ、看板や沽券ばかりを重んじて、時代おくれになった、倒産寸前の老舗のことは笑えなくなるだろう。

老舗を現代に生かすこと。これが今、宗教界に与えられた最も重大な課題ではあるまいか。

ンの香りがまづ第一に要求されるのかしら。つるつるのおしゃかさまでは、どうもピンとこない。キリストが棘の冠をかぶれたのも禿げていなかったからかもしれない。

宗教といい、信仰というも、矢張り時代のヴォーグに超然たるものではない。出来得べくんば、時の若き世代の心を、ギューとつかむべきである。それには、矢張り若い人々の胸を打ち、心をしめつけるものがなければならぬ。

仏教は、その年令既に二千七百歳。も早や、「漆黒の髪」を誇るわけにはゆかぬだろうが、せめて「ロマンス・グレー」で、若い世代の心を掴んで行きたいものである。

精神的ロマンス・グレー、これが現代仏教に課せられた問題となることのぞましい。八十入滅の仏陀。果して、ロマンありしやいなや。この辺の考証は偏えに、中村元博士におねがいしたい。

× × ×

至って、「よし、これで大丈夫だ。」というところまで到達した後、始めて、今まで坐っておいでになった坐禅の坐から立ち上がられて、教化の旅につかれたのである。こうして、釈尊は悟りを自分だけで開かれたのではなく、ひろく一般の人々にも、自分と同じように仏になれる方法を考え出されたのである。

仏というのは、本当の仏たるには、自分丈の成仏では未だ足りないので、人をも仏たらしめんとしてこそ真の仏たり得るのである。その意味で、釈尊が本当の仏になられたのは、さとりを開かれてから四十九日の後だったのである。これが転じて、私共凡夫が死んだ時も、本当に仏になるのは四十九日の中陰がすんでからといわれるようになったのである。だから、それまでは白木の位牌を仏壇とは別に飾り、四十九日すんで始めて、黒塗りの位牌にかえて、仏壇の中へ、先祖の霊と一緒にまつりするわけなのである。年回の数え方は、一周忌丈は九一年、三回忌以後亡った年を入れて数える。



孤

影

一 瀬 直 行

幸三は会社が終れば、家に帰るより仕方がないのだが、足が重かった。といって、どこへ行くあてもなく、又彼の氣持を救ってくれる友もいなかった。

彼は会社がひけるのを待ちかねて、家途を急ぐ同僚の姿をみるたびに、羨ましく感じた。云わば妻子を抱えながら、あたたかい家庭に、彼はめぐまれていなかった。

幸三の家庭は支柱の根元が腐って、崩れかかっていた。いや既に崩れて、倒れないのが、不思議な位である。

よく幸三は、世間の人から、

「もうおたくさまは、御安心ですね。お子さまは大きくなられたし、お楽しみで結構です」

そう挨拶されるたびに彼は、苦笑をもらし、そんなものかと、自分の日頃の遣瀨ない氣持を、一層いとしく思った。

成程姉の方は婚期をひかえ、銀行につとめてい、云わば自分のこ



とは自分で始末のつく年頃であつた。弟も中学三年に通い、先ずは世話のやけぬ年頃になっていた。彼は二人の子持ちで、今のところでは、どっちも真面目な氣質と云えないことはない。

実際のところ親の幸三とすれば、子供の将来の成育ぶりを夢見て安心してられる筈である。ところが、事實はその逆で、心のうちには暗く、冷たい風が吹き抜けた。

だからと云つて、二人とも親にさからつたり、親にそむいたりするようなことはない。それでいて親子の間にあたたかい情感が少しも通つて来ない。父に背を向けて、それっきりですましている。子供達の世界へ一步も踏みこませようとしないでいるのだ。

矢張親とすれば、なんでもないようなことにも、なにか心配ごとではないかと、あたたかく抱擁して、いたわつてやりたい。又そのように子供からも、やさしい言葉をかけて欲しかった。ところが、両者のつながりは、中途でぶつくり切れていた。

それは何故であろうか。一応幸三は反省してみ、生れながらの偏屈さや人ずきあいの悪い、いささか厭人的な自分の性質をも振返つてみた。が、どうみても、それだけの理由ではなさそうである。

「この頃の若い人は、おたくばかりでなく、皆そうですよ」と、あつさり切り捨てる世間の声が聞えぬでもない。が、矢張そこには母親とも子に、すべては責任があるように考えられ、幸三は一層暗い気持におちいった。

妻のとも子との間は、自分が好むものを相手は嫌い、自分の嫌いなものを相手は好むという風に、ことごとに離叛していた。その異

質同志が、共に同じ屋根の下に暮し、も早や二十年からの年月が、そこに過ぎ去つていた。

幸三は今更に自分の意久地なさを感じ、物憂さ加減を振返つてみた。それにしても最近のとも子は、生涯の上に安心と満足をかち得たかのように、尚その上にふんぞり返つて、日常ことごとに尊大な態度をみせている。

彼女の毒気は年と共に長じていった。生活の安定を得、子供達が成人してゆくに従い、一応若い頃は影をひそめていた悪臭を、俄に放ち始めた。

たとえば夫への不満が子供達への溺愛となつてゆき、又二人の子供達は、それをよいことにして、親母に調子を合わせ、我儘一ぱいに甘えていった。

それはまだしも我慢するとしても、最近のとも子は暗愚そのものの新興宗教にこりかたまつていた。かと思えば、町内その他の婦人団体の役どころにかつがれ、ひとり悦に入つていた。となると、狂気じみた女や鼻もちならぬ連中が、たえず出入りするようになってゆく。

幸三にはそうした濁った騒音が、たえがたい。仕事に疲れて帰つて来ても、家庭があつてないのも同じで、日々息苦しい程の負担となつていった。

よく幸三は世間の人から、

「あなたは今が丁度働き盛りで、これまでの苦勞がみのつたも同然で、結構なことです。すべてはこれからですな!」と、励まされ

たり、うらやましがられたりしていた。

成程世間でいうように、五十の峠もすぎた幸三とすれば、そんなものかもしれない。が、そういわれるたびに、なにがし相手からかわれ、皮肉られているような、あじけなさを強く抱いた。

現在の会社へは戦争前からつとめて、今日どうやら主事までにこぎ付けはしたが、さて本屋裏に入ってみれば、上からは抑えられ、下からはこずかれ、いつも浮かぶ瀬がなかった。その上、仕事にまけては勿論悪く、又仕事に腕をふるいすぎても、これ又まずく、いつも中途半端に、自分をなま殺しにしては、はかない一日を送っている。家にあってもそんな風であつたし、会社に出ても亦同じ頼りない環境におかれていた。

会社の帰途、幸三は六区の裏側を抜け、子供の遊び場になっている小さな公園に、ふらっと立ちよつてみた。暮あしは早く、既に周囲は薄暗かった。片隅の石に腰かけ、ぼんやりとあたりを眺め、映画街の方からもれて来る浅草の騒音をきいていた。

仏教ものしり帖

阿修羅（アシュラ）

勇ましい、猛々しいことを阿修羅のようだという。

これは元来、インドの神様だったが、仏教では仏様の守護神の一

公園の一方には公孫樹の枯葉が、北風に散つて、吹きよせられていた。ブランコには、二三人の女の子がのつて、騒いでいた。

砂場のわきには四方を古亜鉛板で囲った小屋がたっていた。その前には鍋のかかった七輪の火が燃えている。十歳位の男の子が、あたりから木屑を拾つて来ては、くべていた。そこへ母親らしい日にやけた小柄な女が、バケツに水をくんで来た。おそらく公園の横にある共同便所からくんで来たのであろう。その傍では、父親であり夫である三十五六の男が、さっきから拾い集めた竹籠の中へ首を突込み、紙屑をより分けていた。

やがて夕食の仕度がととのい、バタ屋の一家は疲れを休めながら親子水入らずの楽しい夕食の膳を囲んでいた。鍋からあたたかい湯気がたっている。嬉しそうな談笑がもれて来る。夕闇が迫り、小屋の中には蠟燭がともっている。なんという世間をおそれぬ一家の逞しい姿であろうと、暫らく幸三は暗くなるのも忘れ、見とれていた。

(了)

とされるようになった。

阿修羅の中の大将を阿修羅王といい、六道といって、この世を六つに分けた一つの修羅道の支配者となった。修羅道とは、人間がこの世で、お互いに憎しみ合い、傷け合い、殺し合うすがたをさすのである。だから、この神の顔は真赤で怒りの相をなし、甲冑をつけ、右手に華棒を持ち、左手を腰に当て、左右に衛兵を従えている。そして、常に戦場にあつて、人々の殺し合い戦い合っている姿をじつと眺めているのである。人の心の争い心をあらわした神である。



百万石も笹のつゆ

ここがまあ、終の住家か、雪五尺

この一句を残こして、一茶はうるさい都をあとにして、雪深い故郷、信州柏原へ隠棲した。

ところが、折角、静かな一人切りの生活に喜んでいた一茶のところへ、或日、村の名主の嘉左衛門があわただしくやって来た。

「お前の風流の道（俳句）が加賀のお殿様のお耳に入って、御用とのお言葉ぢや。わしと一緒に、中村の御本陣まで行っておくれ」

そういうと、一茶は、にがり切って

「風流に御用とは何ごとかい」と、殿様の御用と喜ぶと思いのほかな挨拶。嘉左衛門も、平常の一茶の氣象に、ああそうかと気がついて

「いや御用とは悪かった、わしの間違いちや。実は、おり入って是非にとのお招きぢや

から、何とかまげて行つてほしい。でない
と、このわしが困るからの」

「名主さんを困らせるのも、気の毒ぢや。では行きましょう」

「それはありがたい。まあ、殿様の前では、お世辞の一つもな、よろしくたのみますよ」
そうして、二人、殿様の前に出た。

「ようこそ参った。今日そなたを召したの
は、余の儀ではない、俳諧の話がききたいの
ぢや」

一茶はこれにこたえて

「俳諧の話し、さようさ、花鳥風月、一とし
て俳諧ならぬはありません。しかし、風流を
あそびごとと考えられているおえら方には、
本当の俳諧の道はおわかりにはなりますまい
よ」

友だちにでもいうように、いともそつ気な

く言つてのけた。しばらくの話ののち、さて
おいとまというときになって、傍らの嘉左衛
門の顔をみて

「そうそう、ついつい忘れておりました。名
主さんから、いいつけられていたことをね」
と笑いながら

驚や、御前へ出ても、同じ声。

と一句をしたためて帰つて来た。家の者が待
ちかねて、御前の首尾をきくと、筆をとつて
すらすらと書いた一句は

何のその、百万石も、笹のつゆ。

一茶にとっては、百万石の大大名も、別に
他の人と変りないものであった。

また、ある時、久々に江戸に出て、或る有
名な宗匠をたづねた。その身なりが余りに粗
末なので、弟子達は、「先生は留守です」と
追いかえしてしまった。その時一茶は、土産
に持参したソバ粉を、玄関の式台にサッと撒
きちらし、その上に、指で

信濃にもそばと仏と月夜かな

としたためるや、あとをもみずに立ち去つて
しまった。玄関の人の氣配に、奥から宗匠が
出て来てこれを見るや、

「おお、これこそ一茶ではないか」

と門人に跡を追わしたが、すでにその姿を求めることは出来なかった。

人は、えてして、上わべでものをみる。立派な風采の人の前に出ると、何となく固くなる。大金持ちや、有名な人には、何げなく話しかけることが出来ない。それは、自分の心がおくしているからだ。これに反して、自分にも、人にない立派なものを持っていると自信さえあれば、一茶のように、たとえ百万石の殿様の前に出ようと、時めく宗匠の家に行こうと憶するところがない。余のことは知らず、俳諧の道では何人にもひけはとらぬぞという、烈々たる自信があるからである。身なりは貧しくとも、心は豊かである。いや、上わべのものは、いつかははがれる時が来るが、心の底からの輝きは、永久に輝きつづけるものである。俺は貧乏でも、信濃には、そばも、仏も、美しい月夜もあるぞ。何で、江戸などで、俗気の中に駄死せんや。一茶はそう思ったのだ。

素裸の人間

「賢人と愚人とはどうして見分けることが出来るか」

こう訊ねられた哲学者があつた。彼は即座に答えて

「二人を素裸にして出せ、すぐにわかる」

といった。
何を意味しているかよく解らぬが、ともあれなかなかの名答であるといった感じがする。

裸で人間の前へ突き出された場合わたくしは一体何をするであろう。子供のようにならぬに何のためらいもなく堂々として居ることは恐らく出来ないと思う。何故なら既に頭の中にいろいろの雑夾物が混入しているからである。

だから今無理失理にそうさせられたらと考へ、先づその智慧の出どころが心配である。勿論それは真剣な智慧であり、ありきりの智慧に違いない。

独立だといって世界の舞台に突き出されて居る政治家なるものも、国際的緊張を緩和するためという目的に一堂に集つて会合をしている世界の政治家たちも地位名誉、義理、人情、面子といった名望附きで出されているのであるから到底賢愚もわからずに居るのである。

人間の赤裸なる生命のふれ合うことこそ大切なのである。だというのにそうしたヴェールを着て話し合っていたのでは、いつの日か解決せんということにならう。

名策か愚策の見当も恐らくつくまい。いい

かえれば着物のままで風呂に飛込んでその上から垢を落そうとして磨き合っている姿であり、賢愚のわかる法はない。物が無いのなら端的に物を作る道に出ればよい。石炭が足らぬのなら足るように端的にその道を開けばよい。

やれどうの、こうのといつて自分の衣装を気にしたり人の着物を論じている場合ではない。すべての執着を離れて互に素裸になつて互の腹の中を打明け合うことが出来なくてはいつまでたつても今日のもやもやとした空気は消えないことであらうと思われる。

立法だとか、利潤だとか採算だとかいう着物を飾りたてているものだから名策か愚策かの見当がつかぬ。

みんなが裸になれば真剣な点でも全体に賢しこくなり各々の適否を知つて生存の道を見出すであらう。

よく小さい問題であるが就職の場合でも本人も考え、周りのものも考え易いのに職を選ぶ癖がある。大学でも出ているとなかなか一寸やそつとで一般の仕事に入つていかずブラブラしている。これは裸にならぬ証拠であり

職をいやしく考える大きな誤謬の觀念による。

とにかく個人としても又国としても素裸になるのにまことにいい条件に今わが国はある。

すべてからく達観する気持が湧いて欲しいものだ。

本月下旬には、衆議院議員の総選挙が行われる。いつもさわがれる公明選挙の道はいつ開かれることか、日暮れてなお道遠しに終らなければよいが。

×

×

×

×

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

座右の銘

川を泳ぐが如く手を動かしておよぐ。休めば必ず溺れん。

その如く念仏を休めば則ち危し
(鴨長明)

わが道は心より出ず心正しからざれば志浄く、心浄からばすなわち道を得ん (三慧経)

愚は貧を以て自らを縛る。彼岸に渡るを求めず。貧を敗処となすが故に人を害しまた自ら害す
(法句経)

法然上人の言葉



〔第二回〕

増 谷 文 雄

「善人なおもて往生す。いわんや悪人をや。」

【二期物語】

ここに、もつとも異論のおおい一句をとりあげる。それは、異をこのむ心からではない。この一点を明白にするにあらざれば、法然のおしえのすべてが曖昧となるからであり、この一句の心が鮮明にせられるとき、この師の言葉のことごとくが、光彩をはなつて輝きはじめるであらうからである。

「二期物語」とは、「別伝記」とともに、京都の醍醐三宝院の座主義演准後の書写した「法然上人伝記」におさめられている、いわゆる醍醐本である。その内容は、法然の

伝記を記述するとともに、念仏のおしえに関するこの師の腹藏ない言葉をあつめ記したものである。つまり、伝記と語録のいまだ十分に整理されないものを併せ記したものであつて、それだけに、後人の潤色と歪曲をうけることのない純粹性と素朴性をたもっている。その筆者はわからないが、その資料は勢観房源智（一一八三—一二三八。百万遍の開基）によることが明らかであり、その成立は、おそらくとも嘉禎三年（一二三七）以前であると考証せられるから、勅修御伝や九卷伝が法然の没後百年を経てなかったのとは、おのずから趣きを異にするものがある。

ここにあげた一句は、その語録の部分の末尾にあり、原文は漢文をもつて、「善人尙以往生況悪人乎事」とあり、さらに、その下に細字をもつて「口伝有之」と二行にわたつ

それにつけて思い出すことは、「上人のつねに仰せられし御詞」のなかに、「口伝なくして浄土の法門を見るは、往生の得分を見うしなふなり」という一節があることである。宗教の論理は常識の論理とことなり、彼岸の理路はしかし此岸の俗論の意表にいずる。禅家は「貧なるが道にちかし」と語り、基督者は「なんじの敵を愛せ」とおしえる。だが、おどろくべき宗教の論理のなかにおいても、もつとも驚ろくべき論理は、悪人こそがこの道の正客であるとする他力念仏のおしえであるかと思う。

「無智の罪人の、念仏申て往生すること、本願の正意な

た人である。無用の誤解はさけねばならぬ。責任をもって発言しなければならぬ。あるときには、

「罪人なほむま（生）る。いかにいはんや善人をや」

と語らねばならなかったであろう。また、あるときには

「悪人すてられずば、善人なんぞきらはん。」

と語ったとしても、すこしも不思議ではあるまい。また、あるいは、

「悪人をもすて給はぬ本願ときかんにも、まして善人を

ばいかばかりか、よろこび給はんと思ふべきなり。」

と語るべき対機があつても、すこしも矛盾ではないのである。

だが、常識の論理とことなる念仏の信仰の論理は、つまるところ、こうでなければならぬ。第一には、機すなわち主体のがわの自覚においては、「身をば罪惡生死の凡夫とおもへば、自力をたのむことなくして、ただ弥陀の本願に乗じて往生せん」と願うのであり、それに対しは、法すなわち如来の本願のがわからいえば、そもそも「阿弥陀如来は、罪惡深重の衆生の、三世の諸仏も、十方の如来もすてさせ給ひたる我らをむかへんとちかひ給ひける」のである。そうしてみると、論理の当然は、罪惡深重の衆生こそ、この念仏のおしえにおける「最上の機」であり、「ま

さしきうつはもの」であるとしなければならぬ筈である。

ただ、そのことを判然と打ち出して語ってよい場合は、どのような場合であろうか。それは、当然、機すなわち主体における自覚じゅうぶんに熟している場合でなければならぬ。法然のがわより言はば、対する機のいかんによつて、それがきまるのである。衆をまえにして語るときは、その最後の言葉は吐きかねる。筆をもって記すときにも、慎重のうえに慎重をかさねねばならぬ。はばかりとくなく、判然と語ってよい場合は、よく熟した心境の対機と、一対一の相對坐をなした時にかぎられる。

「口伝これあり」とは、この「善人なおもて往生す。いんや悪人をや」の一句が、この念仏のおしえの最後の言葉であることを意味する。一対一の對坐のなかで、はじめて口をもって説き伝えうる奥義であることを意味する。今日の常識をもってすれば、筆をもって書きのこされたものが確實であり、口をもって伝えられたものは覺束ないと思う。しかるに、宗教のあたらしい生命と価値とが生産されつつあったかの時代においては、口伝こそが最高の重さをもっていたのである。そして、かの「選択本願念仏集」のおわりに、

「庶幾^{ねがわ}くは、一たび高覽を経たるの後、壁底に埋め、窓前に遺^なるること莫^なれ。恐らくは破法の人をして惡道に墮せしむる也。」

と記した法然の心もおなじ理にかようなものであつたであらう。また、かの「歎異抄」の末尾に「外見あるべからず」と記した唯円、ならびに、さらに、それに「後書」して、

「右のこの聖教は、常流大事の聖教なり。宿善の機なきに於ては、左右^そなくこれを許すべからざる者なり。」

と記した蓮如の心も、また、おなじ機微が存したゆえであつたからであらう。

なお、この「一期物語」の法然のなかにおいては、この口伝の一句についてののみ、筆者の私釈とおもわれるものが加えられてある。それは、おそらく、法然に師事すること十八年におよんだという勢觀房源智その人の私釈であらうか。その中の一節には、

「弥陀の本願は、自力を以て生死を離るべき方便ある善人の為にをこし給はず。極重惡人、無他方便の輩を哀んでをこし給へり。」

とあり、また一節には、

「凡夫の善人もこの願に帰して往生を得。いわんや罪惡

の凡夫もつともこの他力を憑^{たの}むべしと云うなり。」

と釈されてある。この口伝の一句の心が、惡人正機のおしえを語つたものであることは、まったく疑いの余地も存しない。

すでに注目をうながしたように、この口伝の一句は、かの「歎異抄」の第三段の一句とまったく符合する。だが、これまでの教学においては、法然の意見は「善先惡後」であつて、親鸞の意見は「惡先善後」であつたとする。その故に、この「一期物語」の口伝の一句は、これを無視しようとする態度であつた。

それは不可であると私は考える。法然の意見もまた「惡先善後」であつた筈である。いな、法然のおしえが惡人を正機とするものであつたがゆえに、親鸞は、そのおしえをそのままに、惡人こそ正機であると語っているのである。それゆえ、私は、かの「歎異抄」の第三段のこれまでの読み方は、まちがっている主張する。

そこでは、まず、「善人なおもて往生をとぐ、いはんや惡人をや」と、いきなり、惡人正機の見解がうち出されている。ついで、世間では、「惡人なを往生す。いかにいはんや善人をや」というが、それは道理あるににて、まことは「本願他力の意趣」にそむくものであることが語られて

「よく善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。」

だが、おそるべき宗派的偏見のしわざは、浄土宗のがわにも存する。

筆者 東京外国語大学教授

A diagram showing a rectangular arrangement of points marked with 'x' on a light-colored background. The points are arranged in a grid-like pattern, with some points appearing to be connected by faint lines.

現代妙好人伝

武田セホ夫人の信仰



中川大仙

一

東北の名刹、盛岡円光寺住職武田真隆上人は昭和二十五年一月二十八日七十五歳で御遷化になりました。上人は宗門の公職、大本山の外護、寺門の興隆、檀信徒の教化、特に地方青少年の教化に尽力せられました。当寺の十夜法要は五日間で、法要前には子供会、法要後には一般布教を二時間、布教中心に勤めて居られた。私は昭和の始め、四年続いてこの十夜布教に來り、その高德に接し、親しく教化の実状を見聞し、内助者の功績をしみじみと感じました。

二

武田真隆上人は、三十一才の時、岩谷堂近藤セホさんを迎え、結婚の式を挙げられました。新夫人は、明治十五年生れで、この時二十才でありました。県立盛岡高等女学校を卒業の後、東京目白の日本女子大学に学び、その第二回卒業生であります。当時は盛岡の東北高等女学校に歴史、国語の教諭として奉職して居られましたが、間もなく職を辞して、専ら寺庭婦人として、住職を補佐することになりました。

三

檀家に新亡があると、その中陰中、及び祥月命日には施主の御位牌に御膳を供養し、毎

朝数十膳を整えて、その施主の方が来詣の時に御接待をするのが、夫人の日課でありました。雑務が余りにも多く、忙しいために、読書することもできず、始めのうちは随分悩まされたようでした。その中に、寺庭夫人として住職と共に御寺を守るためには、住職は法務のため外出がち故、参詣にこられた方々に満足して頂けるようにつとめることが、仏様に仕えることだと気づかせて頂き、それからというものは、早朝から、内外の清掃、御供養を整え、御参詣の方を待つようになりました。いろいろお話を伺っている中に、社会の一面を知ることでもできました。又家庭の悩みを聞いて上げて、及ばずながらお力添え申上たこともありました。

昭和五年、お十夜法要の近づいた頃のこと中陰で毎日参詣にこられる山本貞子さんという方がありました。遠方のため人力車でこられるのでした。この方は近頃御主人に死別せられ、力にしていた東京遊学中の長男が、危篤という電報がその学校から届いた。急いで上京、学校へ行きますと、いつもと変りなく教室で授業を受けて居られた時、突然倒れた。

直ちに医師をよび手当をして頂いたが、心臓麻痺ということ、死亡されたことが明になりました。後に残った子供達と淋しい日を送る中、参詣して二人の白木のお位牌の前で、しばらくは涙もとまりません。こうして、心の悩みを伺う時、お慰め申上げるとは、只共に御念仏唱え励まし合うように努めています。お十夜五日間を楽しみにして居られますよと、お十夜に参り、お聞きいたしました。

お十夜がすみ、翌日山本さんがお出になり、お目にかかりいろいろ伺いました。続いての不幸にあい、世間にある一家心中のことが能く分るような気がして、今は死の道を選ぶより外は無いと思いつめました。いつも奥様に親切に慰められ、何べんか思い直したことでありました。このたび、お十夜五日間参詣させて頂き本当に生きる道に気づかせて頂きましたと喜ばれ、奥様と共に喜びあわれるのであります。

こうして檀家の方と親しくして居られるので、説教の案内も行届き参詣も満堂という具合であった。お説教の時は台所の手伝にきている人達を本堂に案内して、奥様は本堂の入

口に座って聴聞して、最後まで聴衆の静粛を見守って居られました。

今日もまた簪とる身のうれしさよ

はかなくなりし人を思へば

明日もまた朝とくおきてつとめばや

窓にうれしき有明の月

奥様が明るく朗かな生活を続けられているお氣持を伺った歌であります。

四

寺は相当収入もあるが、寺門経営に、堂宇の修繕、位牌堂の新築に熱意を以て居られる住職の意志に協力し私は一生絹布を廃し木綿着を用いることに致しました。生活改善運動のため、県農会囑託講師として県下農村の婦人会に数年講演に廻られたことがありました。こうした時にも夫人は木綿着で出かけ、演壇に立ち時局婦人の任務について親切に熱意を示された。地方婦人の自覚となり互に協力するようになり大に実績を挙げられた。実行力程強いものはありません。

五

結婚後子供が生れぬ体質であることを知った夫人は、住職の了解を得て、人様の子供を

育てさせて頂くことにした。原則として、

妊娠中にお約束をして頂くこと

生後七日以内に迎え受けること

生母の所へ乳を頂きに通うこと

之だけは自分でやって他人をわずらわさない事を心に誓いました。檀家の中でお願いできる所をたよりましてお願いいたします。お許を頂けば、我が子として生れる日を待ちました。生れると、七日も待ち遠く迎へ受けて、

乳幼児の育て方の母性愛に生き、日々生長してゆく姿に喜びと育てる勇氣を感じました。私が十夜布教滞在中、中学三年生が、お母さん只今というときすぐ母の膝の上に胸の所に手を入れ、お乳をさがすのを私が見受けました。夫人はその時、之の子が十三人目の末子で甘え坊ですと嬉しそうでありました。宗門の大学を出て住職している方。女の方で女学校の教諭となつていらっしゃる方、画家もあり、事務員もあるという子宝のお母様であった。十人育てた母として語られた言葉に、本人の能力と希望により十分注意して育てたつもりでございますが、今になってつくづく考えるところの子供が生家にいて、両親の慈愛に養育

せられた方が幸福であつたかも知れぬ、私の育て方が知らず知らず一つの型になつて、十分にそれぞれの天分を發揮できぬようになつてゐるかも知れぬと心静に子供達に対して懺悔の合掌をいたしています。

何と尊い反省でしょう。こういう反省の中に育てられた子供は仕合であると深く感じました。

六

昭和五年の十夜に参いました時は、別に健康上異状無く、朝早くから手拭を姉様かむりにして清掃に立働いて居られた姿をお見受けしたほどでした。昭和六年私が平壤華頂寺に赴任して間も無く、盛岡名産せんべいを送つて頂き、朝鮮の信徒の方々にもお福分して内地特産を味い遠方までお心にかけて頂いたことを感謝しました。

その後健康すぐれず静養して居られました。昭和七年四月法然上人降誕八百年記念大法要が大本山増上寺に於て執行せられた時、住職武田真隆上人が唱導師を勤められた。夫人はこの時病床にあつて念仏を申しながら、大法典の時刻に遙拝して居られた。

ブジタイヤクハタシタ

の電報を手に頂いて、溢れる法悦と深い感激の清浄な涙で合掌念仏して居られた。病床中常に念仏を唱え、看護の人達にも合掌感謝を述べ、見舞にこられる方々にも不安病苦を語ることなく静に念仏を唱え合掌感謝して居られました。

昭和九年二月一日住職法縁子供達檀信徒多数に見守られ一同静に低音念仏の中に正念大往生せられた。時に五十三才。

廉譽慈光善大姉

円光寺の墓地に葬る。

一同慈母に別るる思いの至誠の涙で葬儀が行はれた。盛岡の新聞は三日間連載で生前の功績を讀え多くの人から慕はれて居られました。お子様方の母を追慕するその時の切なる実感を述べて、

母は立派な信仰を持っていた。人生を達観していた。静に人生を味いしじみと大生命を感じて、弥陀の浄土に行かれたあの清浄な姿を尊く慕はれてならない。

南無阿弥陀仏

いとうべきもの

我の大いに嫌うもの

世に二つあり

学者にして

神を信ぜざるものと

無智にして

迷信に陥れる者と

これなり。

——マホメット——

慈 悲

母の

愛する一人児に

慈悲を垂るるが如に

ひとしく

あらゆるところにおいて

あらゆるいきものに対して

慈悲を垂れよ。

——法 句 經——

新規会員紹介

神奈川	東京	東京	秋田	新潟	北海道	新潟	熊本	長野	北海道	群馬	青森	北海道	和歌山	新潟	東京	神奈川		
西念寺様	源照寺	大竜寺	高橋海竜	新善光寺	工藤淳亮	法然寺	安井就道	信行寺	円浄寺	定往寺	滝沢松野	柏竜導	嶋中英峰	伊藤慎隆	西光寺	松村正吉	法性寺	横井久運

会員だより

○拝啓 奥信濃にも春が訪れてまいりました。山間に囲まれた辺隔の地に住していますと、ラジオ新聞等の報道機関が、社会のうごきを知る唯一のものとなつています。一日の野良仕事をおえて夕食後のひとときが、私には一日の疲れを癒やしてくれる最大のものです。その私にとっては大事なひとときを更に意義づけてくれるものが、最近菩提寺の和尚さんによつて紹介されました。それが「浄土」という雑誌でした。宗教誌にはめずらしいザン新な感覚があらわれ、ており生き生きとしたものを感じました。かつて仏教というものは老人のなぐさめ事と思つて居りました私は、自分の宗教に対する無智を恥じるとともに、いま、あらたに眼がひらかれたような喜びを覚えていきます。毎月の編集の御苦心

いかばかりかと御察しいたしながら愈々御健闘あらんことをお祈りして居ります。長野 永井金次郎

○此度は「浄土」をお送り下さいまして、有り難うございました。掲載されているものは、心から現代人に通ずるものと拝察申し上げます。世の無信仰の方々にもよく理解する事が出来ました様でした。私も人々に仏教をおひろめする事の勉強となり心強く感じております。

仏教の智慧即慈悲の持たれる意味が如何なる内容であるかということも次方にはつきりして来た様に思われます。亦私の愛に関する考えも、ほぼ仏教の慈悲の心に近い処にある様に思われてうれしく思われます。仏教を他の人々にお進めするとしても、あくまでも人生をもととして私の知るわずかなもので、忘れられた仏教への再認識の為に努力しております。

東京 中山

「浄土」購読規定

一部定価 金四十円

(送料四円)

会費 金 四八〇円

(送料不要)

浄土 五月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年四月廿五日

印刷 昭和三十三年五月一日 発行

〔定価四十円〕

編集人 竹中 信常

発行人 佐藤 密雄

印刷人 大橋 貞雄

印刷所 共同印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人讃仰会

振替東京八二二八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

解説増谷文雄 画井上与志夫 詩 島田きんや

保育ののさま

B 5判 七色刷 美本
定価 八〇円 一六六円
(十部以上七〇円(実費))

この本は、宗祖 法然上人のご生涯とご教旨を、少年少女にわかりやすく、親しみやすい形で描きだしたものです。内容は、国宝「勅修御伝」によったものであります。

指導 外語教授 増谷文雄 画 中村ひろし
監修 東大大正講師

教育 法然さま
B 5判 一〇四頁
定価 一三〇円 二二四円
(十部以上一〇〇円(実費))

うつくしい絵と、やさしい童謡とで、仏の世界のイメージをおさな心の中に、植えつけるようにつとめ、お母さま方のために、それぞれの絵に解説をつけました。

若い世代の人々のために!!

大正大学教授
竹中信常著

宗教心理の研究

A 五判 五九〇頁
定価 一二〇〇円 二二四円
(十部以上一〇〇円(実費))

宗教が現代人の心理にどのような受けとられているかということ、古来の学説吏に即して説明すると共に、信仰の心理、靈感の心理、宗感心等をテーマとしてとり上げている。宗教を理解し、信仰を他に伝えんとする者にとって必読の書である。

発行所

青山書院

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)
振替東京 九九三〇三番

取扱

法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

浄土寺院必読の書 増版
仏教大学教授坪井俊映著

浄土三部経概説 全

A 5上質紙・特製本
三段組・六三五頁
定価 一、二〇〇円

初版たちまち売切れ!

仏書のベストセラーはこれだ!

浄土三部経を最も判り易く解説した本書を ぜひ

毎日新聞評 この経典は浄土門の拠所となるもの。浄土宗義を明らかにする目的で綿密に注釈、解説が行われている。

常盤大定 監修

B 6各四三〇頁余 総ルビ

仏典説話全集全十二巻 特價 三、六〇〇円

(送料共)

御希望に依り第三巻及第七巻増刷して全十二巻を揃えましたからお申込下さい。なお分冊売りはしません。

高橋良和著

影絵物語 法然さま
価九〇円
一六六円

法然上人の御一代記を美しい影絵によって物語る二色刷の影絵絵本

話 児童 幼

日本図書館協会選定図書
高橋良和・小関尚之・山田巖雄他著
星の花
価一八〇円
二四四円
すぐその儘お話に使えるお話の台本

発行所

隆文館

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十三年四月二十五日印刷 昭和三十三年五月一日発行

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円十八円

目次

- 1. 大慈悲の仏教
- 2. 知性を超えて
- 3. 美的情感を超えて
- 4. 本願の不思議にて
- 5. すべてを包む愛
- 6. 人生は信ずる心から
- 7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版 三十一頁
定価二十円十八円

目次

- 1. 馬に水を飲ませるもの
- 2. 流れゆくもの
- 3. なやみとまよいのもと
- 4. すでに救はれている
- 5. 信ずるところ
- 6. 仏を思う
- 7. 新しい生活
- 8. 美はしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土

第二十四卷

第五号

定価金四拾圓(送料四円)

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ 2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ 3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ 4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ 6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ 4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム 中型	¥ 28,000
単式滑台 中型	¥ 23,000
複式滑台 中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達実費(都内横浜 500 円以内
其他1000円以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費当社・送料着払)

組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町718
電(75)1024(池上駅東3分)

幼稚園 保育園 運動遊具

全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価にの
ットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。